

## 山岡鐵舟像 建立の記

山岡鐵太郎 姓は藤原 名は高歩 鐵舟と号す 父は 幕府飛騨郡代 小野朝右衛門(六百石)母は 常陸国(現茨城県)鹿島神宮社人 塚原石見の次女 磯 天保七年(一八二六)六月十日 江戸に生まれる 父の任地 飛騨高山(現高山市)にて少年期をすごす 九歳にして劍の道を志し 久須美閑適齋に 眞影流を学び 書は 十五歳の時 飛騨高山の 岩佐一亭から弘法大師入木道 五十二世の道統を受け 一楽齋と号す

嘉永五年(一八五二)父 朝右衛門死去 鐵舟は 幼い弟達を連れて江戸に帰着 弟達をそれぞれ他家へ養子に出し 自分は劍の道を極めようと井上清虎の門に入り 北辰一刀流を学び 槍術は山岡静山について刃心流を学ぶ

安政二年(一八五五)静山急死にともない望まれて山岡家の養子となり 静山の妹 英子と結婚

劍の道は なお一刀流の正伝を極めるため 浅利又七郎義明に随学十数年 明治十三年(一八八〇)三月三十日 明け方 無想劍の極所を得て 同年四月 無刀流の開祖となる

禅学は 武州柴村(現川口市)長徳寺願翁 豆州澤地村(現三島市)龍澤寺星定 京都相国寺独園 同嵯峨天龍寺滴水 相州鎌倉円覚寺洪川の五和尚に参じ終に天龍寺滴水和尚の印可を得る

慶応四年(一八六八)三月五日 十五代將軍徳川慶喜の命を受け名代として慶喜討伐軍(官軍)の支配下にある東海道を薩摩藩士 益満休之助をともない駿府(現静岡市)の官軍大総督府に向かった 陣営を通過するに及び「朝敵 徳川慶喜の家来 山岡鐵太郎まかり通る」と名乗って動ずるところが無かった

大総督府で参謀の西郷隆盛と会見し 主君慶喜が朝廷に對して恭順の意を表していることを伝え「同胞 相争うべきではない」と説いた 至誠の人鐵舟の説得に 西郷隆盛が心を打たれ 討伐一本やりの強硬派を押さえて 三月十三・十四兩日の江戸薩摩藩邸における西郷 勝・山岡会談への道を開いた

官軍は この会談の結果を受けて四月十一日 江戸城に「無血入城」し百万都市 江戸は戦火を免れることができた

西郷隆盛の鐵舟評「命もいらす名もいらす 官位も金もいらぬ このような始末に 困る人でなくては 艱難を共にして国家の大業を成し遂げることが出来ません」は今や 人物を評する時の格言となっている

明治五年（一八七二）六月十五日 西郷隆盛の強い要請により鐵舟は明治天皇の侍従となり 青年天皇の教育掛りとして十年間お側につかえ 明治十五年六月二十五日 辞任した しかし 天皇は それを惜しまれ引き続き宮内省御用掛を務めるよう命じた

鐵舟は 幕末と明治の激動期に世界の中の日本の未来を洞察し 一身を賭した行動で 国家の危機を救い多くの有能な人材も育成して近代日本の基礎を築いた

明治二十一年七月十九日没 享年五十三 従三位勲二等子爵

鐵舟禅寺戒名 鐵舟寺殿前宮内少輔 従三位 雲外高歩大居士

勲二等

居士の遺徳を偲び建立す

平成二十年七月十九日

静岡市清水区緑が丘町

松本 検

撰文 東京都

坂部 健

静岡市

若杉 昌敬

彫塑

高岡市

熊谷 友児

制作

高岡市

(株)平和合金

この礎石は 鐵舟禅寺建立に際し 明治二十一年十一月 清水次郎長こと 山本長五郎が寄贈したものである

正面の題字は「信」 鐵舟居士書